



PHILHARMONIA AETERNA
The 23rd Regular Concert

フィルハーモニア・エテルナ
第23回定期演奏会

指揮:垣内 悠希

ピアノ:横山 幸雄

2017.7.16 Sun

Sumida Triphony Hall
すみだトリフォニーホール

 ご挨拶

本日は私共 PHILHARMONIA AETERNA 第 23 回定期演奏会にご来場頂き誠にありがとうございます。

本日の演奏会の指揮台には、当団初登場となる垣内悠希氏をお迎えします。垣内氏は、2011 年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝、以降国内外で実績を重ねてきた若きマエストロです。

ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番のソリストには、横山幸雄氏をお迎えします。横山氏とは過去3回に亘り共演を重ねてきましたが、2001 年の初共演時の演目が、同じ作曲家のピアノ協奏曲第3番でした。今回 16 年ぶりにラフマニノフの名曲に取り組みます。

ラフマニノフは交響曲・歌劇・室内楽曲・歌曲、そしてピアノのための協奏曲・独奏曲と多岐に亘るジャンルに作品を残しましたが、生涯最後の作品である「交響的舞曲」に至っても作品番号の数字はようやく 45 に達しただけでした。作品番号で 18 という数字を持つピアノ協奏曲第2番は、ラフマニノフ 27 歳の時の作品です。交響曲第1番の初演失敗からピアノ協奏曲第2番での再起に至る経緯は、催眠療法のエピソードと共に良く知られています。若者の持つ過剰さと単純さを内に抱えながら、ロマンティックな心情を横溢させる名曲をお楽しみ下さい。

ブラームスのピアノ四重奏曲第1番も 20 歳代後半に作曲された作品です。ブラームスもラフマニノフ同様、多岐に亘るジャンルに作品を残しましたが、歌劇だけは作曲しませんでした。もしかするとその辺りにこの二人の作曲家の資質の違いが現れているのかもしれませんが。シェーンベルクによるオーケストラへの編曲には対しては様々な意見があり、それぞれの射たものですが、管弦楽版を聴いた後に室内楽版を聴いても大きな違和感を覚えさせないという意味では、ブラームスの意図を体現した素晴らしい編曲といえるのではないかと思います。

どんな場合でも、初対面というのは多かれ少なかれ緊張するものです。垣内先生との初練習に臨む我々も同様でした。譜面の細部を積み上げて準備を進めてきたオーケストラに対して、音楽の大きなフレームを意識するように求め、音楽の高揚と沈潜を描こうとするマエストロ。最初はごちなさを残していたオーケストラでしたが、時間が経つにつれ指揮者の意図を汲み取ることが出来るようになっていきました。その結果、回を重ねるごとに、音楽の新たな面が生み出されていく充実したリハーサルとなりました。お互いの意図、個性を理解するというプロセスの重要性を、団員一同改めて認識した次第です。本日の演奏会でも、単にリハーサルを再現するのではなく、垣内先生の指揮のもと生み出される新鮮な音楽を皆様にお届けしたいと思います。

垣内先生との出会いで得られた新たな気付きを糧に、より一層柔軟性を持ったオーケストラへと成長すべく活動を続けて参ります。皆様方におかれましても引き続き当団の活動をご支援いただけますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、練習の指導を頂きました石川先生、山田先生他の皆様はこの場をお借りして御礼申し上げます。

プログラム

J.ブラームス (1833-1897)

悲劇的序曲 作品81

Johannes Brahms

Tragic Overture Op.81 (14m.)

(演奏時間:約14分)

S.ラフマニノフ (1873-1943)

ピアノ協奏曲第2番ハ短調 作品18

Sergei Rachmaninoff

Piano Concerto No.2 in C minor Op.18 (35m.)

第1楽章 モデラート Moderato

第2楽章 アダージョ・ソステヌート Adagio sostenuto

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド Allegro scherzando

(演奏時間:約35分)

— 休 憩 —

J.ブラームス (1833-1897) (管弦楽編曲:A.シェーンベルク (1874-1951))

ピアノ四重奏曲第1番ト短調 作品25

Johannes Brahms (Arr. A.Schönberg)

Piano Quartet No.1 in G minor Op.25 (35m.)

第1楽章 アレグロ Allegro

第2楽章 “インテルメッツォ” アレグロ・マ・ノン・トロッポ

Intermezzo: Allegro ma non troppo

第3楽章 アンダンテ・コン・モート Andante con moto

第4楽章 “ツイゴイネル風ロンド” プレスト Rondo all Zingarese: Presto

(演奏時間:約35分)

プロフィール

指揮者 垣内 悠希

Yuki Kakiuchi, Conductor



photo Jean Philippe Raibaud (c)

2011 年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝。現在、その将来が最も嘱望される指揮者の一人である。

2012 年 4 月東京フィルハーモニー交響楽団定期演奏会を指揮し東京デビュー。ブラームス交響曲第 2 番では、「鋭敏な色彩感覚の反映された名演」と評された。ウィーンを拠点に、フランス国立ボルドー = アキテーヌ管弦楽団、イル・ド・フランス国立管弦楽団、ブリュッセル・フィルハーモニー管弦楽団、ミュンスター交響楽団、サンクトペテルブルク交響楽団、ウィーン室内管弦楽団、チリ交響楽団等、国内でも東京都交響楽

団、読売日本交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、京都市交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、群馬交響楽団、広島交響楽団、九州交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢等にも客演。2013 年にはミュンスター歌劇場でオペラ・デビュー。3 月には、小澤征爾氏の強い推挙を受けて小澤征爾音楽塾オーケストラを指揮して好評を博した。

1978 年東京生まれ。6 歳よりピアノを始め、14 歳より指揮の勉強を始める。これまでに小澤征爾、佐藤功太郎、レオポルド・ハーガー、ヨルマ・パヌラ、ジャンルイジ・ジェルメッティ、エルヴィン・アッツェル、イザーク・カラブチェフスキー、湯浅勇治の各氏に師事。2001 年東京藝術大学楽理科を、2009 年ウィーン国立音楽大学指揮科を首席で卒業。次いで2011 年同音大劇場音楽科特別課程を修了。

2016 年 4 月より札幌交響楽団指揮者。ウィーン在住。

プロフィール

ピアノ 横山 幸雄

Yukio Yokoyama, Piano



(c)ミュージエンターテインメント

1990 年ショパン国際コンクールにおいて歴代の日本人として最年少で入賞し、文化庁芸術選奨文部大臣新人賞はじめ数多くの賞を受賞。以来人気実力ともに音楽界をリードするトップアーティストとして活躍。

ショパン生誕 200 年を迎えた 2010 年に、ポーランド政府よりショパンの作品に対して特に顕著な芸術活動を行った世界で 100 名の芸術家に贈られる「ショパンパスポート」が授与される。

2010 年「ショパン・ピアノ・ソロ全 166 曲コンサート」はギネス世界記録に認定。翌年には全 212 曲 18 時間に及ぶ全曲暗譜演奏の偉業を成し遂げ、自身の持つギネス世界記録を更新した。この公演は毎年少しずつ形を変えてゴールデンウィークの恒例コンサートとなる。

2013 年からベートーヴェン生誕 250 周年に向けてスタートした「ベートーヴェン・プラス」や、2015 年パリにおいてラヴェル生誕 140 年を記念し全曲演奏会を成功させるなど、数々の意欲的な取り組みにより、高い評価を確立している。

リリースされた CD は文化庁芸術祭レコード部門優秀賞、国際 F. リスト賞レコードグランプリ最優秀賞等栄えある賞を受賞。近年では「プレイズ・リスト 2013」「プレイズ・シューマン 2014」「プレイズ・モーツァルト 2015」「アンブロンプチュ〜シュベルト即興曲全曲」(2016 年)「雨だれのプレリュード」(2017 年)をソニー・ミュージックダイレクトよりリリース。

東京 FM「ピアノでめぐり逢い」パーソナリティをつとめ、東京と京都にレストランをプロデュースするなど活躍は多岐にわたる。

上野学園大学教授、エリザベト音楽大学客員教授、日本パデレフスキ協会会長。

オフィシャルサイト <http://yokoyamayukio.net/>

プロフィール

副指揮者 石川 真也

Shinya Ishikawa, Conductor



宮城県仙台市出身。成城大学卒業後、桐朋学園大学音楽学部オーケストラ研究生指揮科で学ぶ。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、黒岩英臣各氏に、ピアノを玉置善巳、作曲、音楽理論を三善晃各氏に師事。1986 年より、二期会、東京室内歌劇場などにおける、オペラ公演の副指揮者として研鑽を積むほか、二期会合唱団の指揮も務める。それと並行して NHK 主催による JMJ オーケストラをはじめ、各地の大学オーケストラのトレーナーとしても活躍した。これまでに、群馬交響楽団、セントラル愛知交響楽団などを指揮するほか、全国各地のアマチュアオーケストラ及び合唱団に招かれ、積極的な指揮活動を行っている。

1995 年には、つくば市において、ビゼー作曲「カルメン」を指揮し、オペラデビューを飾る。1999 年 7 月には韓国に招かれ、韓国の音楽大学学生による弦楽オーケストラを指揮した。2002 年には、平多バレイ団 55 周年記念公演において、オーケストラの指揮を務める。2013 年には、宮城県多賀城市主催による復興の第九コンサートを指揮し、好評を博した。2006 年から、夫婦でピアノデュオを結成し、音楽祭などで活躍中。

お知らせ

<第24回定期演奏会>

日 時: 2018年9月17日(月・祝) 13:30開演

指 揮: 十束 尚宏

ヴァイオリン独奏: ヴィルフリート・和樹・ヘーデンボルク(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)

曲 目: ミクローシュ・ロージャ／ヴァイオリン協奏曲 作品24 ほか

<団員募集のお知らせ>

私どもフィルハーモニア・エテルナでは、楽器、出身を問わず、幅広く団員を募集しております。本日の演奏をお聴きになりご興味をお持ちになりましたら、下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。

フィルハーモニア・エテルナ事務局(小山)

e-mail : info@phil-aeterna.org

ホームページ : <http://www.phil-aeterna.org/>

Facebook : <https://www.facebook.com/phil.aeterna>

プロフィール

フィルハーモニア・エテルナ

PHILHARMONIA AETERNA

「永遠の音楽愛好家たち」との名を冠する当団は、アマチュア最高の音楽を創造することを通じて、聴衆と団員双方が「通い合う」時間と空間を共有することを目標とし、1995年5月、在京の大学オーケストラの卒業生を中心に結成された。爾来、十分な練習期間、メンバー同士の強い音楽的な連帯、優れた指揮者・指導者、長期的な視野に立った計画といった、質の高いアンサンブルを実現する上で欠かせない要素、環境を着実に整えながら活動を継続している。

定期演奏会は概ね年1回程度の頻度で開催し、指揮者には十束尚宏氏をお迎えしているほか、吉田裕史氏の客演もいただいている。これに加え、アンサンブル能力の向上を目指したベートーヴェンの交響曲を軸に据えた演奏会や、指揮者を置かない演奏会、小編成の曲からなる演奏会なども開催している。2000年8月にはオーストリアのウィーン（於：ムジークフェラインザール）への演奏旅行を実現したほか、新潟県長岡市での同市の市民合唱団との特別演奏会も二度にわたって開催している。

共演するソリストについては、団としての音楽的、人間的な紐帯を基礎として世界的にその実力が認められている方々を招聘しており、これまで、ウィーン・フィルのコンサートマスターのW.ヒンク氏、D.ゲーデ氏、同首席チェロ奏者のF.ドレシャル氏、同ホルン奏者のT.イエプストル氏、ベルリン・フィルのチェロ奏者のS.コンツ氏（いずれも現職・元職を含む。）、ピアノ奏者の横山幸雄氏等のご出演をいただいたほか、2015年にはヴァイオリン奏者のV.レーピン氏との共演が実現した。同氏においてはこれがアマチュアオーケストラとの初の共演となった。

近年ではプロ・アマを問わず取り上げられることの少ない作曲家の作品にも積極的に取り組んでおり、コルンゴルトやシュールホフの作品の日本初演、十束尚宏氏の作品の世界初演（2011～2016年）を果たしたほか、難曲と位置付けられる作品も取り上げるなど、新境地の開拓に果敢に挑んでいる。

現在は、慶應義塾大学、京都大学、東京理科大学、東京大学、立教大学、早稲田大学等の学生オーケストラをはじめとする多彩なバックボーン、個性を有するメンバーによって構成されており、これまでの共通の経験を土台にして、より強い、明確な個性を持ったオーケストラへと不断に変貌していくことを目指している。



ワディム・レーピン氏との共演(2015年)



J.ブラームス：悲劇的序曲 作品81

悲劇、と言われてしまうとギリシャ悲劇、シェークスピアの悲劇、あるいは近松の心中物といった、抗いようのない運命に主人公が翻弄され、追い込まれていくストーリー構成を思い浮かべてしまうものである。しかしこのヨハネス・ブラームス(1833-1897)の《悲劇的序曲》に関してはそういった物語的な背景は念頭に置かれていないようである。低い音域を重厚に鳴らしつつもシンコペーションを効果的に使うなどして、むしろ流麗さ、精神の若々しさを際立たせ、全体もきっちりソナタ形式でまとめてくるという筆遣いには舌を巻くばかり。批判を恐れずに言えば、「ブラームス・ダイジェスト」とでもいうべき高い完成度を誇る演奏会用序曲である。

作曲されたのは1880年の夏。作曲に散々苦勞した《交響曲第1番》の完成から4年、あっという間に書き上がったという第2番の完成からも3年が経過し、さらに翌年には《ピアノ協奏曲第2番》が、83年には《交響曲第3番》が世に出るという、この綺羅星の如き管弦楽作品群だけを見ても円熟期というのにふさわしい時期の作品である。

世間的にも作曲家としての揺るがぬ名声を確立していたところ、前年の79年にブレスラウ大学(現在のポーランドのブロッツワフ大学)の哲学科から名誉博士号を授与された。その返礼として翌年に作曲されたのがかの《大学祝典序曲》であるが、この《悲劇的序曲》はそれと同時期に作曲されたものであり、作品番号も80、81と連続している。最初の二つの交響曲にも見られるように曲想の全く異なる作品を立て続けに作曲するというのはブラームスの行動パターンの一つだそうである。再び批判を恐れずに言えば、経緯的に少々迎合的なノリを有する《大学祝典序曲》を作ってしまった手前、「決して芸風が変わったわけではない!」とでも言いたげな心の声が感じられる(のはきつと私だけだろう。。。)。

初演は《悲劇的序曲》が一足早い1880年12月であるが、翌年1月から数度に亘ってブラームス自身の指揮でこの二曲が一緒に演奏されている。

Tp. 岡 良介

S.ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番ハ短調 作品18

『メロディこそ音楽であり、すべての音楽の礎である。メロディとハーモニーを軽視し、騒音と不協和音で乱痴気騒ぎを演出しようとする作曲家もいるが、私には到底理解できない』（筆者訳）

甘美で感傷的なメロディで満ち溢れたこの曲は、セルゲイ・ワシーリエヴィチ・ラフマニノフ（1873-1943）が自身の作曲家としての信条を体現した不朽の名作である。

1892 年、モスクワ音楽院を首席で卒業したラフマニノフはただちに《前奏曲嬰ハ短調》を発表、19 歳にして作曲家としての名声を手に入れた。ところが 1897 年、23 歳になった青年ラフマニノフに人生最大の試練が訪れる。（酒気を帯びた）グラズノフの指揮で初演された《交響曲第 1 番》が大失敗に終わり、酷評を受けたのである。これに最愛の女性との失恋も重なり、音楽家としても、人間としても自信を喪失。約 2 年間、五線紙すら直視できないほどの不安症、鬱、そしてアルコール依存症を患った。この試練を救ったのは医師ニコライ・ダーリ博士との出会いである。博士による心理療法により体調と自信が徐々に回復するなか、「失われた 3 年」を取り返すように、そして蘇った創作意欲に突き動かされるがままに作曲されたのが、この《ピアノ協奏曲第 2 番》である。「ダーリ博士に捧げる」と記された本作品は 1901 年 11 月、モスクワにおいて作曲者本人のピアノで初演され、大成功を収めた。

第 1 楽章：Moderato

ロシア正教の鐘の音を思わせるピアノの和音で幕を開ける。鐘の音は次第に緊張感を増し、最高潮に達すると、壮麗でロシア的な第一主題が提示される。ピアノはオーケストラが織りなす旋律の網の目のあいだを高速なアルペジオで駆けめぐり、音楽にコントラストと色彩を与える。突如オーケストラが鳴り止むと、今度はピアノにスポットライトがあたり、切なくも美しい第二主題が提示される。計算された展開部、ドラマティックな再現部を経てコーダに入り、再び緊張感のある短い終結部で楽章を閉じる。

第 2 楽章：Adagio sostenuto

短い序奏に続いて、フルート、そしてクラリネットが超俗的で甘美な第一主題を奏でる。感傷的な第二主題、ピアノのカデンツァ、ヴァイオリンによる第一主題の再現を経て、幻想的な終結部に入る。



第3楽章：Allegro scherzando

冒頭の低弦による「囁き」、きらびやかなオープンニング・カデンツァに続いて間髪入れずにスケルツォ的な第一主題が提示される。これとは対照的に、オーボエとヴィオラにより奏でられる有名な第二主題は恍惚としたラプソディである。フーガ、カデンツァを経て再度第二主題が提示され、最後は絢爛で圧倒的なオーケストレーションで曲を閉じる。

Cl. 久野 新

J.ブラームス(A.シェーンベルク編)：ピアノ四重奏曲第1番ト短調作品25

原曲であるブラームスの《ピアノ四重奏曲第1番》は、ウィーン定住する直前の時期に当たる1861年に生地ハンブルクで完成させたもので、その青年期を飾る代表的な作品の一つとされている。

オーストリアの作曲家アルノルト・シェーンベルク(1874-1951)がこの曲を三管編成のオーケストラ用に編曲したのは1937年である。ユダヤ人という出自のため33年のナチス政権成立を機にアメリカに亡命したものの初めに暮らした東海岸では不遇をかこち、西海岸で教職を得てようやく経済的安定だけは手に入れたという時期に、同じく亡命中であったユダヤ系ドイツ人の指揮者オットー・クレンペラーの提案によって実現した。シェーンベルクがこの提案に賛同したのは、彼自身この作品自体を非常に気に入っていたものの、演奏される機会自体が少なく、演奏されたとしてもピアノと弦楽器のバランスを取ることが難しいとの思いがあり、「一度全てを聞きたいと望んでいた」からとされている。

編曲後の作品には原曲を丹念に研究した跡が見られ、忠実に管弦楽版に反映させることを通じてブラームスへの最大限の敬意が払われていることが容易に認識できる。一方で、例えば編成についてはバス・クラリネットやコールアングレといったブラームスが使用しなかった管楽器の他、シロフォンやグロッケンなどを含む多彩な打楽器群を加えるなど、当時の最新技術を駆使したシェーンベルク流の作曲スタイルがそこかしこに顔を出している点も興味深い。「ブラームスが今生きていたらこう書いたであろう」と語り、冗談めかして「ブラームスの交響曲第5番」とまで自賛しているが、ブラームスの濃密なメロディの美しさを残しつつ、シェーンベルク特有の彩り豊かでありながら重厚なオーケストレーションがうまく絡み合った20世紀の作品への昇華は見事と言うほかない。

初演は1938年5月7日、クレンペラーの指揮によりロサンゼルスで行われた。

曲目解説

第1楽章：Allegro

冒頭のクラリネットのユニゾンとは原曲でのピアノによる提示部の旋律を表現している。ピアノのパートは曲を通じて多様な楽器が細かく分担しており、それがこの曲の色彩感を一層際立たせる。それにとどまらず時に楽器同士の組み合わせの妙も次々に披露され、変幻自在な音色を与えながら全体を高揚させていく。結尾部はそれまでに示された主題を振り返りながら動きと響きの厚みを減じて、消えるように終わる。

第2楽章：Intermezzo：Allegro ma non troppo

8 分の 9 拍子の三部構成の短調の間奏曲。オーボエとコールアングレによって不安を誘う主題が提示された後、弦楽器群による長調のフレーズから二連符を効果的に用いた下降音型の主題が朗々と歌われる。中間部のトリオでは原曲のピアノのめまぐるしい動きを木管を中心に再現するが、果ては金管・打楽器を総動員するまでの急激な展開となる。第三部は楽章の冒頭部分に戻り主題を再現しつつも終息に向けた動きが徐々に示されて弦楽器の繊細な響きで締めくくられる。

第3楽章：Andante con moto

三拍子かつ三部構成という前楽章の形式を引き継ぎつつ長調が軸となる楽章。冒頭からブラームスらしい壮大な主題が奏でられる。弦楽器を中心に息の長い旋律が次々に紡ぎ出される展開を経た後、一転してリズムミクナ行進曲風となる。ここの音量のコントラストと音色の多彩さは管弦楽編曲版ならではの醍醐味である。第三部は前半の主題を懐かしむように展開させつつ、時間をかけてなだらかに音量と速度を落としながら、穏やかに曲を閉じる。

第4楽章：Rondo alla Zingarese：Presto

「ツィゴイネル風の Rondó」と題する楽章。上昇音型を主体にした躍動感あふれる主題が次々に現れる構成からはこれまでの楽章との明確な対比が読み取れる。弦楽器のコル・レーニョ、ダブルタンギングを駆使した木管楽器の細かい動き、トロンボーンのグリッサンド、シロフォンの硬質な旋律の響き等々様々なアイデアが花を添える。突如として現れるト長調の堂々たる主題は力強く情熱的な舞曲。やがてまた冒頭のテンポに戻ると主題を復唱しながら熱狂の度合いを高めていく。途中、原曲にもあったのではないかと錯覚させるようなクラリネットのカデンツァなども交えつつ、推進力を高めて一気にフィナーレまで駆け抜ける。

Vn. 和谷 彩古